
愛、変わらず

吾仁守

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛、変わらず

【Zマーク】

Z2530Y

【作者名】

吾仁守

【あらすじ】

私は一つ年上の先輩と付き合っていた。でも、先輩の卒業とともに……別れた。こんな私の、先輩と別れた後のラブストーリー。

第一話『私……「ひれちゃった(泣)』

「今年の春はいつもより寒いなあ～」

思わず私は独り言を言つていた。

「本当に寒いのは私の心なのかも……」

また独り言を言つてしまつた。

私がこんな状態になつてしまつたのは、一週間前のあの事件が原因だ。……事件は言い過ぎかも。

一週間前に私は……フられた。私はフられた理由が全くわからなかつた。私と彼氏の関係はかなり良好……だった。

フられた理由で思い当たるのは……卒業式？ かな。彼氏と私は高校の先輩と後輩で、彼氏は今年卒業した。彼氏の卒業と同時に私はフられた。……やっぱり卒業式が原因だ。

「遠距離恋愛になるのがそんなに嫌だったのかなあ？」

あ、また独り言を言つてしまつた。

「お母さん、あのお姉ちゃん独り言を言つてるよ」

子供が指を指しながら、私のことをお母さんに話しかけている。

「……こら。人に指を指しちゃダメですよ」

お母さんは、私に指を指していた子供を叱つた。

「すみません」

お母さんは私の方を向いて謝り、その場から遠ざかつていった。

「変な人に関わっちゃダメよ」

私に聞こえていることも知らず、「……少し離れた所でお母さんが子供に言い聞かせていた。

「お母さん……聞こえますよ(泣)」

私はその場でぼそりと呟いた。

私は、赤城陽。今年高校三年生になつて、そして独り身になつた。

「彼氏がいなくなると、こんなにも寂しくなるんだね」

「そんなことを呟いてる暇があるなんなら、せつねど飯を食べて学

校に行きなさい！」

「はーい」

私のお母さんはいつもマイペースだ。私がフランchedのに、いつもと同じ接し方をしている。むしろ、この方が気が楽だ。

私はご飯を食べて、学校へ行く準備をした。

「行つてきまーす」

「行つてらつしゃーい」

いつもと変わらない学校への登校。唯一変わったのは、彼氏が迎えに来てくれないことだけ。

「今日もちょっと寒いなあ～」

私は、何も考えなくていいように学校まで全速力で走つた。

「ハアハア。全速力で走るとこんなに早く着くんだ」

前だつたら一十分もかかっていた学校までの道のりが、今日は十分で着いた。……今度から毎日走ろうかな。

「あれ？ 阳？ おはよー。今日はいつもより早いわね」

「あ、桜姫。おはよー。今日は走つてきたから、いつもよりも十分早く着いたわ」

彼女は田中桜姫。私と桜姫は幼稚園の頃からずっと友達だ。

「阳は何で走つてきたの？」

「な、なんとなくよ！」

「へえ～、なんとなくね。……実は『彼氏にフランchedされた事を忘れるために走つてきた』……なんてことは無いわよね？」

「ギクッ（汗）」

何で私の考えを、こんなにもピンポイントで当てるのやー？」

「さ、桜姫、とりあえず教室まで行きましょう」

「まさか！ 図星だつたの！？ てか、別れたの！？」「

「とりあえず教室に行きましょーね」

「ちょ、ちょっと……陽！？ 痛いんだけど……」

私は話を誤魔化すために、半ば強引に、靴箱から教室まで桜姫を引っ張りながら歩いた。

第一話『親友』

私と桜姫（半ば強引に引っ張つてきた）は教室に着いた。
「ふう～、やつと教室に着いたわ。あつ、やばい！ 私、春休みの課題が終わってなかつたわ。だから走つてきたんだ。桜姫、そういうことだから」

「……陽、あんたが真面目な子だつてことは昔から知つてる。恋愛をしてようが、部活をしてようが、課題はちゃんとやつてくる子だつてことも」

「桜姫……

「何があつたの？ 私には隠し事はしないでよ」

「実は……」

私は、卒業式の後に彼氏にフランクされた事を桜姫に話した。

「あなたの元彼……サイテーよー 卒業と同時に陽と別れるなんて（怒）

「そ、桜姫がそんなに怒る必要は無いわ。……たぶん私が悪いのよ やつぱり元彼が全部悪い！ こんなに可愛くて優しい陽を裏切つたんだから」

「裏切つたは言い過ぎだよ」

「あんな人を庇う必要は無いわよ。あんな人のことはさつさと忘れて、新しい恋を見つけるわよ！」

「……新しい恋。見つけられるかなあ？」

「弱気になつちゃダメ！ 何事も強気でいかなきゃね

「そうだね。私、桜姫みたいに強くなる」

「あんまり私みたいな方がないわよ

「どうして？」

「……男子が近寄つてこなくなるからよ」

「そ、そなんだ……。桜姫可愛いのに」

「陽に比べたら、私なんか全然可愛く無いわよ。それに、現在の男

子達は性格を重視してるみたいよ

「性格が良くないとモテないってことね」

「そうね。私は今日から女を磨くわ。クラスも変わったし、ちゅうどいい機会だわ」

「桜姫は今までいいと思つんだけど……」

「ありがとう陽。でも、そう言つてくれるのは陽だけよ」

「そうなの?」

「うん。だから私はもつといい女になれるようにならんばるわ。幸いにも、このクラスで私のことをよく知つてゐる男子は少ししかいないみたいだから」

「ホントだ。知らない男子が多いね」

「そうなの。そして、イケメンで優しそうな人が多い」

「相変わらず桜姫はイケメン好きだね」

「相変わらずとは失礼ね。性格もちゃんと見るわよ。今日から私は変わるんだから」

「ホントかなあ?」

「ホントよ。いい彼氏を見つけられるように、しっかりと見定めるの」

「今日は本気だね!」

「もちろん! お互に、いい彼氏をつくるわよ」

「うん!」

「こうして、私と桜姫のいい彼氏づくりが始まった。…………何か私、切り替えがかなり早い気が…………。ま、いつか。」

第三話　『まおはお友達から』

新しい恋を見つけると決心した私と桜姫は、まずは男友達をつくることにした。

「陽、まずは男友達をつくることが大切よね」

「そうだね。まずは男子と仲良くなる必要があるね」

「 そ う よ 。 そ し て 、 最 初 に 誰 と 仲 良 く な る か が 重 要 よ ! 仲 良 く な る 人 を 間 違 え た ら 、 高 校 最 後 の 一 年 は 悲 し く 寂 し い も の に な る こ と 聞 き て 無 い だ つ

間違ひ無したわ」

「大袈裟じゃないわよ。男なんて、みんな獸よ！
化けの皮を被つ
てるの！」

「やつなのー!?」

「やつよー、陽は男のじとをまるでわかつてないわねー。」

「JR、JRなんだから」

「な、なんで謝るのよ？」

「桜姫の気迫にびっくりして…………つい」

「男は獸つてことは少かりと認識しておくれ」とわかつたわね?」

「了解です！」隊長！

「た、隊伍何で？！」

「なんかそんな感じしかしたから」

「私は隊長なんて柄じゃなしね」

「梓姫が照れてる」と愛い

二〇

「かつました」

「隊長つて呼ぶのやめなさい！」

「また接姫が照れてる。可愛いー」

「もうー、陽のこじわるー……まあ、いいわ。とりあえず、誰かに

声を掛けるわよ」

桜姫はクラス中を見渡した。そして、あることに気がついた。クラス中の視線が自分たちに集まっていることだ……。
もちろん、いつからこんなことになっているかなんて知る由もないかった。

「……やばいわね」と、桜姫が小声で言った。

「何が?」と、陽も小声で言った。

「今までの私たちの会話を、男子に全部聞かれてたかもしれないわ」

「うん。知ってるよ」

「な、何で教えてくれなかつたの!?」と、桜姫が大声で言った。

今度はクラス中がざわつき始めた。

「や、やばっ」

桜姫は赤面し、小声で、

「何で教えてくれなかつたの?」と陽に問い合わせた。

「桜姫がすごく楽しそうに話してたから、言えなかつた。『ごめん』

「は、陽は悪くないわ。悪いのは、気づかなかつた私の方よ。……

……」これから、このクラスは、私たちにとつて戦場になるわよ

「なんかホントに隊長みたい」

「もう何でもいいわよ!」

私と桜姫は、アウェイな状況の中で、男子に声を掛けることを決心した。

第四話『お友達にならなかった』

クラス中の人羞恥を曝した私たち。そんな私たちと仲良くしてくれそうな男子に声をかけるために、私たちはクラス中を見渡していた。

クラスには、いろんな男子がいた。ほとんどの男子は、一般的にイケメンと呼ばれるような顔立ちをしている。

「ねえ、陽。誰に話し掛けた?」

「桜姫は、誰が仲良くしてくれると思う?」

「うーん、あそこにいる人とか優しさうだよね

「うん。優しさう」

「でも、ちょっと私のタイプじゃないかも」

「あれ? 性格も重視するんじゃなかつた?」

「そ、そつだつたわ」

そんな会話をしていたら、会話の中心になっていた男子が近づいてきた。

「ねえ君たち、さつきまで面白そうな話をしてたよね? 次は何の話をしているの?」

思いがけないチャンスが舞い込んできた。

「うーん、……あなたについての話」と、桜姫が答えた。

「へえー、僕についてかあー。何て話してたの?」

「優しそうだから、友達になりたいなあー、って話してたの」と、またも桜姫が答えた。

全く会話に入れない私。

「僕と友達になりたいの?」

「う、うん」と、僕が戸惑いながら、またも桜姫が答えた。

「じゃあ友達にならうー!」

「はやつ! ……じゃ、じゃあ、まずは自己紹介をしましょ

「そうだね。僕は、立花流^{たちばなながれ}君は?」

立花くんは、私の方を見ながらそう問いただしてきた。

「わ、私!? 私は赤城陽」

「陽ちゃんって呼んでいい?」

「あ、はい。私は立花くんって呼びます」

「うん。いいよ」

「ちょっと待つたあーーー! 何で私の存在を無視するのーーー? 立花くん、今まで私と話してたよね?」

「あ、ごめんごめん。さっきまで君とずっと話してたから、次は陽ちゃん」と話そうかなあと思つて」

「そりだつたの? セ、せめて血口紹介だけでもセセレーヌ」

「それじゃあどうぞ」

「なんかかなり言いづらいくんですけど.....。が、いいわ。私は田中

桜姫

「じゃあ桜姫ちやんって呼んでいい?」

「OKよ。私も立花くんって呼ばせてもらひつわ」

「陽ちゃん、桜姫ちゃん。今日からようじへ」

「『リハビリ』そ、よろしく~」

こうして私たちは、立花くんと友達になつた。なんかかなりあります友達になつたけど、大丈夫かなあ? ま、いつか。

第五話『さ、避けられてる！？』

立花くんと友達になつた私たちは、立花くん以外の男友達をもつとつくるために、クラスに立花くんの知り合ひはいなかを尋ねていた。

「立花くんは、このクラスに知り合ひはいるの？」と、桜姫が尋ねた。

「このクラスに知り合ひは…………いないみたい」

「そ、そななんだ」

「ごめんね。役に立てなくて」

「そ、そんなことないわよ」

「そうよ。とりあえず、仲良くなれそうな人を探そ！」と、私が提案した。

またも私たちはクラス中を見渡した。

「立花くんは、誰が友達になつてくれると思う？」

「うーん、…………あの人とかどうかなあ？」と、立花くんは一人の男子を指さした。

「なかなか人の良さそうな人だね」と、桜姫が答えた。

「よし、じゃあ声を掛けてみよう！」と、立花くんが言い、男子に近づいていった。

だが、男子は立花くんから逃げるように教室から出て行った。
それから立花くんは、とぼとぼとこちらに戻ってきた。

「…………なんか僕避けられてるみたい」

立花くんは、かなり落ち込んでいた。最初の印象とはかなり違う人と思えた。

「た、立花くん。落ち込まないで」

「う、うん」と言いながらも、まだ落ち込んでいるように見えた。

意外と立花くんは打たれ弱いことがわかつた。

改めて、私たちはクラス中を見渡した。

一時見渡して、あることに気がついた。……クラス中の人私が私ちと目を合わせないようにしていることに……。

「……みんな目すら合わせてくれないような気がするんだけど」と、

桜姫が言った。

「みんな目を合わせないようにしてるんだよ」と、私は言った。

「私たちと関わりたくないのかな?」

「……たぶん。今年は受験もあるし」

「そうだね。受験があるのに、変に騒いでいる私たちと仲良くしてくれる人なんてなかなかいないよ」

「立花くんは、なかなかない人の一人だね」

「……僕は、なかなかない人の一人かあ」

なぜかテンションの上がっている立花くん。……立花くん、実は天然なのかな?

「そ、そうだね。……とりあえず、まずは私たちのクラス中での印象を変えないとね」と、桜姫が言った。

「三人よれば文殊の知恵なんて言つからね。まずは三人で何とかしますよ」

「さすが陽。陽がいれば百人力よ! 立花くんも頑張ろうね」

「やつと会話に入れてくれた! 僕も全力を尽くすよ」

三人は結束し、もつと多くの男友達をつくるために努力することを誓つた。……はあ、彼氏はいつ“い”ができるんだろう?~

第六話 「数々の難関」

午前八時。担任の先生が来てホームルームが始まった。

「おはよう！ 今日からこのクラスの担任をすることになった原熱^{はいあ}志^しだ。今年で三十路になる。よろしくな！」

クラス中が少しずわづわつき始めた。先生が三十路に見えないくらいイケメンだったからだ。

「俺が担任になつたからには、お前たちの目標を全部実現してやる。だが、条件付きだ！ 毎日努力をすること、それと……恋愛をしないこと！ これが条件だ」

ざわついていたクラスが一斉に静まりかえった。

「よしつ、じゃあ一人ずつ自己紹介をしてもらおうか」

一番前の人から順番に自己紹介をしていき、立花くんの番がきた。

「僕は立花流。現在、男友達募集中！ よろしく！」

「そうか、立花は男友達を募集中なのか。じゃあ、先生が友達になつてやる！」

「えっ！？ ジャあお願ひします」

「おう、よろしくな」

「『あははは』」

クラス中から笑いが巻き起こつた。やつぱり……立花くんは天然だ。

立花くんの後に何人かが自己紹介をし、次は桜姫の番になつた。

「田中桜姫です。今年の目標は彼氏……じゃなくて、山竜大学合格

です」

「田中、なんか彼氏つて聞こえた気がするんだが」「

「き、気のせいですよ先生。とりあえずよろしくお願ひします」

桜姫、本音が出てるよ……。

そんなこんなで、とうとう私の番になつた。

「えーっと、赤城陽です。目標は一柳大学合格です。よろしくお願ひます」

いします」

全員の自己紹介が終わった。一段と田立っていたのは、やつぱり立花くんかな。

「やつと全員の自己紹介が終わったな。今日からビジバシ行くからな！」

彼氏ができるも、原先生にはバレないようになないと……。

今日一日の授業がやつと終わった。

放課後、クラス中の人のがいなくなつてから、私たち三人の作戦会議が開かれた。

「どうすれば印象を良くできるかな？」と、私は質問をした。

「印象を良くするためには、まずは挨拶かな」と、立花くんが答えた。意外とまともな答えだつた。

「挨拶かあ。……明日の朝から、廊下ですれ違つたクラスメート全員に挨拶をするつていうのはどうかな？」と、桜姫が提案した。

「よしぃ、じゃあそうしよう！」

「決まりだね！」

こうして私たちの作戦会議は終わつた。でも、私は少し不安に思つていた。挨拶をするだけで印象が変わるものだろうか？……まあ、どうにかなるでしょ！

第七話 「私たちってウザい？」

登校二日目。今日から作戦決行だ！ 私たちは顔を合わせたクラスメート全員に挨拶をした。挨拶を返してくれる人もいれば、無視する人もいた。

「初日の反応は微妙だったね」と、立花くんが言った。

「印象変わったのかな？」と、桜姫が言った。

「ごく少人数かもしれないけど……」と、私が言った。

「少人数でもいいんじゃない。少しでも仲良くしてくれる人が増えるといいね」

こんな会話をしていると、こちらに近づいてくる男子が一人いた。ヤンキーっぽい人だ。

「お前たち、朝挨拶をしてきた奴らだよな？」

「そうだよ。君は？」

「俺？ 俺は篠山早駆(しのやま さく)だ。お前たちは、昨日かなり目立つてた奴らだよな？」

「め、目立つてたつて何よ！？」と、桜姫が食つてかかつた。

「ちょ、ちょっと桜姫！？ 落ち着いて」と、私が止めた。

「それで早駆くんは何の用なんだい？」と、立花くんが尋ねた。

「お前たち……ウザいんだよ」

「『えつ？』」

三人とも声を揃えて驚いた。

「う、ウザいつて何よ！？」と、またも桜姫が食つてかかつた。

「お前らのことは、最初つから気にくわなかつたんだよ」

「何なのよー？ 何が気にくわなかつたのよ？」

「全部だよ！ 特に、その男！ お前を見るとイライラする

「勝手な言いがかりはやめなよ。みつともない」

「立花くん、何だかかっこいい！」

「そういう態度がムカつくんだよ！ 今年は受験もあるんだから、

邪魔すんなよ！」

篠山くん、何気に真面目！？

「気にくわなかつたんなら」めん。今後氣をつけるわ」と、私がフオローをした。

「ちつ。……今度から氣をつけろよ」

意外にも、あっさり引き下がった。聞き分けのいい人で助かった。篠山くんは自分の席に戻つていった。

「篠山くんは私たちのことをウザいって言つてたけど、他の人はどう思つてるのかな？」と、桜姫が言った。

「他にも、ウザいとか鬱陶しいとか思つてる人はいるんじゃないかな」と、立花くんが言った。

「だったら、朝の挨拶はやめた方がいいんじゃない」と、私が提案した。

「……こんな」とで諦めたくない！」と、桜姫が怒りのこもつた口調で言つた。

「どうして？」と、立花くんが尋ねた。

「私は、今年変わつて決めたの。だからこんなことで諦めたくないの！」

(今年は絶対に彼氏をつくる…)

桜姫は心の中で自分に言い聞かせていた。

「よしつ！じゃあ、明日も頑張ろう」

「うん！ 桜姫のために頑張ろう」

「私だけのためじゃないでしょ…？」陽もでしょ…」

「そうだね」

「私たちには、明日からも挨拶を続けることを決めた。……篠山くん以外に。

第八話『協力者』

登校二日目。私たちは今日も挨拶をした。挨拶を返してくれる人が増えたような気がした。

「みんな結構挨拶を返してくれるようになってきたわね」

「うん。僕たちの印象が変わってきてるのかもしれないね」

「これなら、私たちと友達になってくれる人が出でてくるかもしれないね」

私たちは期待に胸を膨らませていた。しかし、放課後まで誰も声を掛けてくれなかつた。そして、放課後の三人の会議が開かれた。「私たちのやつてることって無意味なのかな?」と、私は尋ねた。「そんなことは無いよ! 少しずつだけど、効果が出てるよ」と、立花くんが言つた。

「そうだよね。明日も頑張ろう!」と、桜姫が言つた。

ガラガラガラ……。急に教室のドアが開き、一人の人が立つていった。

「田中、何を頑張るんだ?」

そこに立つていたのは、原先生だつた。

「せ、先生!? どうしてここに?」

「なんか騒がしかつたから、様子を見に来たんだ。それで田中、何を頑張るんだ?」

「え、えつとですね……」

「挨拶ですよ」と、立花くんがフオローをした。

「挨拶か。何で挨拶を頑張るんだ?」

「えーっと、……なんとなくです」

「そうか。なんとなくで、こんな会議みたいなことをしているのか

「…………」

「田中、本当の理由は何だ?」

「男子と……仲良くなりたかつたからです」

「そうか。男子と仲良くなつて、何をするんだ？」

「勉強を教えてもら「うんです」と、私は桜姫をフォローした。

「なるほど。……別に男子だけに限定する必要は無いんじやないか

？」

「桜姫が咄嗟に口走つただけですよ。もつひん女子とも仲良くなつて、勉強を教えてもらいますよ」

「そうなのか田中？」「

「は、はい。そうです」

「それならそ「うと卑く言えよ。先生も協力してやるー」

「『ほえつ？』」「

三人とも一斉に驚いた。

「何だその声は？先生が協力するのは嫌か？」

「『『いえ、滅相もございません』』

三人とも息ピッタリだつた。

「お前たち、本当に仲が良いんだな。よし、俺は明日からお前たちに協力する」

「『『よ、よろしくお願ひします』』

「おう、任せとけ！ それじゃあまた明日な」

なんか知らないけど、先生が私たちに協力してくれることになつた。……ややこしい事にならなければいいけど。

第九話　『せ、先生！？』

登校四日目。朝のホームルームが始まった。先生が余計なことをしなきやいいけど……。

「みんなおはよう。ちゃんと勉強してるか？」

「当たり前じやないですか」と、篠山くんが言った。

「そうか、篠山は勉強熱心なんだな。……効率良く勉強する方法があるんだが、知りたいか？」

「効率良く勉強する方法？ それはどんな方法ですか？」

「それは……友達と一緒に勉強することだ！」

「友達と一緒に？ それだと余計に効率が悪くなると思うんですけど」

「確かにそう思うかもしれない。だけど、それは勝手な思い込みだ。友達に教えることによって、自分の勉強になる。友達に教えられることによって、その教えられたことは深く印象に残る」

「でも、一人でもふざける人がいたら、まともに勉強できないと思うんですけど」

「確かに。でも、それをしつかりと抑止できるのが友達だ」

「そんなことをしている暇は無いですよ。やっぱり一人でやつた方が効率が良いですよ」

「逆に、一人でやると集中できないなんて奴もいる。それに一人じゃわからない問題だつてある。そんな時に教える友達がいればスムーズに勉強ができる」

先生、良いこと言いますね。

「…………。ていうか、何でそんなに友達と勉強することを奨励するんですか？」

「このクラスで、友達と勉強することを望んでいる人がいるからだせ、先生っ！？ 余計なことを言わないでえー。」

篠山くんはこちらを睨みつけていた。私は必死に目を合わせない

ようとした。

「先生、俺は一人でどうにかしますよ。やるなら、勝手にやつてくれださいよ」

「……わかった。強要はできないからな。だけどな篠山、いつか差が付くぞ」

「俺は誰にも負けないっすよ」

篠山くんは、怒りのこもった声で言つた。篠山くんの気迫が凄かつた。

「わかった。他の奴ら、明日から朝のホームルームの時間の大半は友達と勉強をする時間にする。もちろん、一人でしたい奴がいれば、それでも構わない。自由にするといいさ。……よしつ、ホームルーム終わり」

先生は教室を出でていった。それと同時に、篠山くんが凄い形相でこちらにきた。

「お前ら、そんなに俺の邪魔がしたいのかよ！」

「そ、そんなつもりは……」

「うるせえっ。センノーを味方につけたつもりか？ そんなのに俺は屈しねーからな！」

「ちよつ、ちよつと篠山くん！？」と言いながら、桜姫がこちらに来た。

「ちつ。……俺の邪魔をすんなよ」と、捨て台詞を吐いて、自分の席へと戻つていった。

「陽！ 大丈夫？」

「桜姫！ ありがとう。……大丈夫だよ」

篠山くんがかなり必死だということが、よくわかった。

「陽、あんな奴のこと、気にしちゃダメだよ」

「う、うん」

私たちつて、また篠山くんの邪魔をしてる？ このままいいのかな？

第十話 『恋の予感』

登校五日目。朝のホームルームの時間は勉強の時間になった。

「みんな、わからないことがあつたら周りの奴に聞くんだぞ。もちろんおしゃべりの時間じゃないからな」

先生がそう言い終わると、桜姫が真っ先にこちらに向かって来た。「陽~、この問題教えて~」

「この問題? これはこうやって……」

私は桜姫に問題の解き方を教えた。

「なるほど~。とても分かりやすい説明だつた」

「桜姫、大袈裟だよ」

「へえ~、赤城さんて頭良いんだね」

急に、隣りの坂下大志くんが話し掛けてきた。しかし、これは絶

好のチャンスかもしれない。

「坂下くん、そんなこと無いよ」

「いや、赤城さんは頭が良い。実は、俺もその問題が解けなかつたんだ」

「そうなんだ」

「……俺にも解き方を教えてくれないかな?」

「うん、いいよ」

私は坂下くんに、問題の解き方を懇切丁寧に教えた。

「なるほど。かなり分かりやすい」

「そんなこと無いわ」

「謙遜する事はないよ。……明日もまた教えてもらつてもいいかな?」

「私に分かることなら、いつでも」

「ありがとう!」

「うん。……ねえ、坂下くん」

「何?」

「私たちって、友達になつたのかな？」

「急にどうしたの？」

「私たちってさあ、登校初日こみんなに変な印象を与えたでしょ？」

「坂下くんもそのことを気にしてるのかなあ」と思ったの

「そんなこと最初から気にしてないよ。俺たちは、もう友達だよ」

坂下くんは満面の笑みでそう答えた。

ドキッ。この一言に、陽の心は奪われた。

「そ、そうだね……。そ、そういうえば、私の友達を紹介するね」

私は桜に顔を向けて、桜姫のことを坂下くんに紹介した。

「私の友達の田中桜姫。友達というか、親友だよ」

「ど、どうも、田中桜姫です。えつと……とりあえずようしきね珍しく桜姫が緊張してる。

「ようしきね、田中さん。俺も田中さんたちと親友になれるかな？」

「な、なれるとと思う！」

「むしろ、それ以上の」

桜姫が全部言葉にする前に、私は桜姫の口を塞いだ。

「それ以上？」

「あははは、何でもないの。そうよね桜姫」

桜姫は必死に頷いた。それを見た坂下くんは、微笑んでいた。

「ホントに仲が良いんだね。俺ももっと赤城さんや田中さんのこと

を知つて、もっと仲良くなる！ そして俺のことももっと知つても

らう！」

「私ももっと知つてもらいたい。これからようしきね

「こちらこそ、ようしき」

坂下くんはとても情熱的な人なのかも……。

陽の心は、坂下へともの凄いスピードで向かっていた。

第十一話 「好きなのかな?』

登校六日目。今日の陽はいつもよりもよりいつも輝いて見えた。

「赤城さん、おはよー」

「あ、坂下くん! おはよー」

「今日も勉強を教えてもらつてもいいかな?」

「もちろん!」

「じゃあ、こここのところを教えて!」

「ここ? ここはこいつやつて……」

陽は坂下くんに、勉強を真剣に教えた。

「なるほど。今回の説明もとても分かりやすい」

「そ、そうかな?」と言いながら、陽は赤面していた。

「うん、分かりやすい。……あれ、赤城さん顔が赤いよ。熱がある

んじゃないの?」

そう言いながら、陽の額に手を当てた。

陽は、さらに赤面した。

「……熱は無いみたいだ。大丈夫?」

「だ、大丈夫だよ」

「一応、保健室に行く?」

「ほ、ホントに大丈夫だよ」と、陽は必死に言つた。

「そう、ならいいんだけど」

そんなこんなで朝のホームルームが終わった。

そして、今日の授業も終わり、放課後になつた。そして、いつも通りの会議が開かれた。

「陽~、朝のホームルームの時に、坂下くんといい雰囲気になつてなかつた?」

「そ、そんなこと無いよ!」

「またまたー。顔が赤くなつてたわよ」

「桜姫、見てたの?」

「もちろん！ 陽は坂下くんのこと……好き？」

「さ、さあ？ どうなんだろう？」

「えっ！ 赤城さん、坂下くんのことが好きなの？」

「た、立花くん！？ 声が大きい！」

「『』、ごめん。それで……どうなの？」

「この感情は、好きってことなのかな？ 今の段階では分からない」「今の段階では分からないうことは、今後好きになる可能性はあるってこと？」

「それも分からない」

「そう。もし陽が、坂下くんのことを好きになつたときは、私は全力で陽に協力する！」

「桜姫……………ありがとう！」

「ぼ、僕も協力する！」

「立花くんもありがとう！」

（私は坂下くんのことが好きなのかな？）

陽は悩んでいた。こんなに早く、人を好きになるのかと……。

「ねえ桜姫、立花くん。初めて顔を合わせてから一週間も経たないうちに、人を好きになることってあるのかな？」

「『』もちろん！」

桜姫と立花くんは同時に答えた。

「一目惚れだつてあるのよ。人を好きになる早さなんて、人それぞれよ」

「そうだね。陽ちゃんが『この人と一緒に居たい！』と思つたなら、それでいいと思う」

「桜姫、立花くん。ありがとう！」

「陽、今年中にいい恋をして、彼氏をつくりなさいよー。」

「桜姫もね！ もちろん立花くんもー。」

「僕も頑張る！」

こうして、それぞれの決意が固まり、放課後の会議は終わった。

第十一話　『私のこと、心の思ひへ。』

登校七日目。今日もまた、朝のホームルームで、陽は坂下くんに勉強を教えていた。

「赤城さん、今日の説明もとても分かりやすかつたよ！」

坂下くんは満面の笑みで言った。その笑顔を見て、陽の心はときめいていた。

「…………ねえ、坂下くん。ちょっと聞きたいことがあるんだけど何？」

「私のこと…………どう思つてる？」

「うーん……頭が良くて、良い人かな」

「…………そなんだ」

「いらっしゃー！そこ、私語は厳禁だぞ！」

いちばんに原先生が来て、原先生に注意された。

「すみません」と、坂下くんが謝った。

「次からは気をつけよう！」

「はい」

原先生は教壇に戻った。

「坂下くん、ごめんね」と、私は小声で謝った。

「気にしないで」と、坂下くんも小声で言った。

「よしつ、ホームルーム終わりだ」

原先生の号令でホームルームが終わった。それと同時に坂下くんは教室を出て行き、そして桜姫がこちらに向かつてきた。

「ねえ陽、何で先生に怒られてたの？」

「坂下くんと少しお喋りしてたら、見つかっちゃった」

「何の話をしてたの？」

「えつと…………秘密」

「ええ～、教えてよ～」

「ダメ」

「私たち親友じゃん」

「……わかつた」

「それで、何の話をしてたの？」

「……坂下くんは、私のことをどう思つてるかっていう話」

「陽……大胆だね！」

「桜姫！ 声が大きいっ！」

「あつ、ごめん。……それで、坂下くんは何て答えたの？」

「頭が良くて、良い人だつて」

「……それだけ？」

「うん」

「頭が良くて、良い人ね。……好きか嫌いか聞かなかつたの？」

「そ、そんなこと……聞けるわけ無いでしょ！」

「そうなんだ。残念」

「……桜姫は私のことばかり気にしてるけど、桜姫は好きな人とか、気になる人とかいないの？」

「私？ 私はまだいない」

「そうなんだ。友達は増えた？」

「友達は増えたよ」

「何て名前の人？」

「切室昇くん。私の隣の席の人」

私は桜姫の隣の席の人を見た。

「イケメンじやん。桜姫は切室くんのこと好きじゃないの？」

「今年の私は性格を重視するの！ 見た目だけじゃ決めらんないよ」

「そうだつたね」

「そうよ。だから、切室くんのことを、もっと知りうつと思つてるの」

「桜姫……。なんか変わったね」

「そうかな？」

「うん。前より、ちょっと大人になつた気がする」

「そんなことないよ。……陽は前よりももっと輝いてる。前も輝いてたけど」

「そんなことないよ」

「お互いに、知らないうちに、少しづつだけど成長してるのはかもね」

「うなのがもね」

陽と桜姫は、自分たちの恋のために、少しづつ前進していく。

第十二話 『坂下くんの家に行つてみない?』

登校八日目。今日は坂下くんは休みだつた。風邪でも引いたのかな?

朝のホームルームが終わり、桜姫が私の席の所に来た。

「坂下くん休みだね」

「……うん」

「寂しい?」

「……ちょっと寂しいかも」

「もお~、素直じゃないなあー。かなり寂しいんでしょ?」

「……うん」

「じゃあ、今日坂下くんの家に行つてみない?」

「行くつて……どうやつて?」

「うーん、……わかんない」

「わからないの?」坂下くんの家に行くなんて言ったの?」

「ごめん。……どうすれば、坂下くんの家を見つけることができるかな?」

「先生に聞く……とか、どうかな?」

「先生、教えてくれるかな?」

「……たぶん教えてくれないね」

「先生が何を教えてくれないんだ?」と言ひながら、先生が横に立つていた。

「せ、先生!?」

「赤城、何でそんなに驚くんだ?」

「お、驚いてないですよ」

「そうか。……それで、先生が何を教えてくれないんだ? 先生が教えられることなら、何でも教えてやる」

「えーっと……」

私は答えに戸惑つていた。

「先生！」と、急に桜姫が言った。

「田中、どうした？」

「坂下くんの家にプリントを届けたいんですけど、住所を教えてくれませんか？」と、桜姫がフォローをしてくれた。
「プリントを届けてもらひるのはありがたいんだが、住所を教えるのは……」

「じゃあ坂下くんに、家に行つていいかどうか、確認をしてください」

「何でお前たちが届けるんだ？」

「私たちは“友達”だからです」

「……わかった。放課後までに確認をしておこひつ」

「あっ！ 確認をする時に、私と陽で行くつて伝えてください」

「わかった。それじゃあ、結果は放課後に」

「ありがとうございます」

原先生は、職員室へと戻つていった。

「桜姫……ありがとうございます」

「別にいいよ。……でも、ホントは陽の口から伝えて欲しかった」

「ごめん。言おうと思つたんだけど……言えなかつた」

「ま、しょうがないよ。坂下くんの家に行つたら、たくさんお喋りしてくるんだよ」

「えっ？ 桜姫は行かないの？」

「私は用事があるから、行けない。だから、陽一人で行つてきなよ」

「……わかった。次は頑張る！」

そして、放課後になつた。

「赤城、田中。坂下に電話をして、確認をしたぞ」

「それで、結果は……」

「OKだそ�だ」

「ありがとうございます！」

「これが住所だ。じゃあ、このプリントを届けてくれ。よろしくな
！」

「はい。任せてください」

原先生は教室を出た。

「陽、ここからはあなたの独壇場よ。頑張つて！」

「うん！　じゃあ行つてくる！」

私は桜姫を教室に残して、坂下くんの家へ向かった。

「陽…………大丈夫かな？」

第十四話『坂下くんの家』

「 ここが坂下くんの家」

陽の目の前には、とても大きな一階建ての家が建っていた。

「おつきいー」

陽は睡然としていた。

「 ……見取れてる場合じゃなかつた」

陽は坂下くんの家の扉の前に立つて、チャイムに指を当てるていた。

(押せ！ 押すのよ、私！)

ピーンポーン。とうとうチャイムを押してしまつた。もつ後には引けない。

「はーい」という声がして、扉が開いた。

そこには、坂下くんのお母さんらしき人が立つていた。

「あら、とても可愛い人」

「」こんにちは。坂下く……じゃなくて、大志くんのクラスメートの赤城陽と申します。大志くんにプリントを届けに来ました」「あら、ありがとうございます。私は大志の母です。……よかつたら部屋に上がつて、大志に会つてやつてください」

「わ、私は……」

「陽さんが会つてくれると、大志が喜びます」

「……それじゃあ、お邪魔します」

「どうぞ」

私は、坂下くんのお母さんに部屋の前まで案内してもらつた。坂下くんの部屋は一階にあつた。

「大志の部屋はここです。大志のことをお願いします」

「はい」

坂下くんのお母さんは、階段を降りていつた。

私は、坂下くんの部屋のドアノブに手をかけていた。

「入つていよい」と、中から坂下くんの声がした。

私はドアを開けた。

「」「こんにちは、坂下くん」

「赤城さん、こんにちは。田中さんは一緒にやなかつたの？」

「さ、桜姫は用事があつたみたいで、一緒に来れなかつたの」

「そつなんだ」

「体調は大丈夫？」

「ちょっと風邪引いちやつって。でも、今は大丈夫。明日からは学校に行けるよ」

「良かった。……あつ、これが今日の分のプリントだよ」

「ありがとう。赤城さんの家つてここから近いの？」

「うーん……、まあまあ近いかな」

「わざわざ届けてもらつてごめん」

「あつ、気にしないで」

「今度何かお返しをすみよ

「別にいいよ」

「いつも勉強を教えてもらつてるし」

「あれは私が好きでやつてることだから」

「じゃあ、……今度の日曜日に遊びに行かない？」

「えつ？」

「嫌……かな？」

「……嫌じやないよ」

「じゃあ、行こつ！」

「……うん、わかつた。……そろそろ帰るね」

「うん。また明日」

「それじゃあまた」

私は坂下くんの部屋を出て、階段を降りた。

「赤城さん、もう帰るんですか？」

「はい。お邪魔しました」

「今日はありがとうございました。今後も大志のことによりしへお願いします」

「いえ、じゅうじょよろしくお願ひします。では、失礼します」

私は坂下くんの家を後にし、家路についた。

「日曜日……楽しみだなあ～」

第十五話 「待ち遠しい」

登校九日目。陽の顔は、いつもよりもやるやうだった。そこに登校してきたばかりの桜姫が近づいてきた。

「陽、嬉しそうな顔をしてるけど、昨日は坂下くんとちやんとお喋りできたの？」

「うん。お喋りできたよ～」

「何を話したの？」

「坂下くんの体調について」

「それだけ？」

「あとは……秘密」

「まさか……デートの約束とか。……それは無いか。いくら何でも、

早すぎるよね」

「…………」

「陽？…………もしかして」

「…………うん。デートの約束をしちゃった」

「えーっ！」

桜姫が驚いていたら、教室に坂下くんが入ってきた。

「赤城さん、おはよう。昨日はありがとうございました」

「お、おはよう。どう、どういたしまして」

「坂下くん、おはよ～」

「田中さん、おはよ～」

「体調はもう大丈夫なの？」

「うん、大丈夫」

「よかつたね。それじゃあ、私は席に戻るね」

桜姫は、私にウインクをして自分の席に戻つていった。

「田中さん、良い人だね」

「うん」

私たちが話をしてる間に、先生が教壇に立つていた。

「はーい、お喋りはそこまでだ。朝のホームルームを始めるや」

いつも通りに、朝のホームルームが始まった。

「赤城さん、今日はしっかり解ってきたよ。答え合わせをしていいかな?」

「うん、答え合わせをしよう」

陽と坂下くんは答え合わせを始めた。

「全問正解。やつたね坂下くん!」

「赤城さんのおかげだよ」

「私は、ほとんど何もしてないわ。坂下くんが努力したからだよ」「そんなこと無いよ。俺がこんなに解けるようになつたのは、赤城さんが一所懸命教えてくれたからだよ」

「そうかな?」

「そうだよ。いつもお世話になつててるから、田曜日いたくさん恩返しをするよ」

「う、うん。田曜日楽しみにしてる」

私たちは、ホームルームの時間といつ」とを忘れて、話に集中していた。

「赤城いー、坂下あー。今は何の時間だあ?」

原先生が怒りを露わにしていた。

「『すみません』」と、一人は同時に謝つた。

「坂下、元気になつたのは良いことだが、ほゞほゞ」とことかよ

「……はー」

「赤城、お前も浮かれてちゃダメだぞ!」

「……はー。すみませんでした」

「分かればいいんだ。よしつ、ホームルーム終わりだ」

原先生は教室を出ていった。

「坂下くん、ごめん」

「気にしないで」

「この前も迷惑をかけたのに……」

「俺は気にしてないから。それよりも、田曜日のことを決めようよ」

「うん！」

「集合場所は……駅前にしよう。駅は家から近い？」

「うん。結構近いよ」

「集合場所は駅前でOK。集合時間は何時にするの？」

「うーん……、正午はどうかな？」

「よしつ、じゃあ正午にしよう。これで決まりだね」

「うん。決まりだね」

「当日のスケジュールは俺に任せへ！」

「うん、楽しみしどくね！」

日曜日がとても待ち遠しい。……はあ。早く日曜日にならないかなあー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2530y/>

愛、変わらず

2011年11月20日03時13分発行